

中学全校朝礼 2月

よく現代は、「不安の時代」と言われます。豊かなはずなのに心は満たされず、衣食足りているはずなのに礼節に乏しく、自由なはずなのにどこか閉塞感がある。そういう時代に最も必要なのは、「人は何のために生きるか」「人はどう生きるか」という根本的な問いかけなのかもしれません。

そこで京セラの創業者である稲盛和夫氏の話をしてします。稲盛氏は小さな会社で何度も徹夜するなどしてセラミックの開発をしていました。その努力と成果を見ていた人たちが、「会社を作ってあげるから、そこでもっと実力を発揮したらどうか」と言われ、一銭も持っていない彼のために京セラを作ってくれたのです。しかし、若く研究一筋できた人間が経営など分かりません。そこで稲盛氏は、こう決めたのです。「正しいことを正しいままにやろう」、そうした単純な規範を、そのまま経営の指針にすえ、守るべき判断基準にしました。そして売上1兆5000億円、利益1000億円になる会社にまで成長させたのです。

さらに NTT 独占では日本の通信は成長しない。対抗できる会社を作り通信料金を安くしていかなければならないと、周囲の協力を得て、君たちの中でも使っている携帯電話auというブランドを扱っている KDDI の前身である第二電電という会社も作りました。

そして、80歳になる時、倒産しかけた日本航空の再建を日本政府から頼まれます。筆者はこうも言っています。「損をしてでも守るべき哲学、苦を承知で引き受けられる覚悟、それが自分の中にあるかどうか。それこそが本物の生き方ができるかどうかの分水嶺になるのではないかと。倒産すると日本経済に悪影響を及ぼす、在籍する3万2000名の雇用を守る必要がある、航空会社が1社では値段が高止まりすると考え、引き受けます。報酬は一切受け取りません。ホテルに泊まりこみ、食事は主にコンビニ弁当、現場に居続けながら社員の意識改革から始めました。そして3年経たずに再建、今の立派な会社にしました。

「人のために」、これが稲盛氏の原動力なのです。つまり、「何のために生きているのか」「どう生きるか」の一つの答えです。

似たような話を本で読んだことがあります。その人は、高校卒業と同時に目的もなく単にあこがれて田舎から東京に出てきましたが、生涯の師匠という人に弟子入りして野菜の行商をしていました。ある時、その師匠から急に4か月後にお店を出すということになり、その人が店を切り盛りするように言われるんです。全くの素人なのですが、4か月間ある有名ホテルでバイトするように言われます。すぐにいろいろ教わると思ったら大間違い。毎日毎日皿洗いばかり。そして先輩の同じ皿洗いの人は愚痴ばかり、その愚痴を聞きながら数十日が過ぎていきます。到底、店をやる修行なんてできません。そして、ある日ホテルを抜け出して、その師匠に止めさせてくれと言うんですね。そうしたらひどく叱られます。「お前、その仕事全力でやったのか。必死になって皿を洗ったのか。言ったじゃないか。最低と思う仕事にチャンスあり」と諭されます。最後にめざまし時計を渡され、この秒針と競うように皿洗いを全力でやってみろと言われ、ホテルに帰ります。今までの教えを振り返り、覚悟を決め、本人曰く「稲妻の洗いもの」といって、やるならと日本一の皿洗いを目指してという勢いで全力皿を洗うんです。そうしたら何日も経って状況が少し変わってきます。同じくらいの年の人もたくさん働いているのですが、あいつを見習えというように、その人の名を出して若い人を叱ったりする、結局気になる存在、いつの間にか認められる存在になっていくのです。ある時、料理長が

「誰か、野菜を買ってこい」と怒鳴っているのですが、皆が大忙しで手が離せません。そこで誰でもいいからと2千円をばあーと投げた時、身体が反応してその千円札2枚を握り、全力で走って買いに行きます。そして、帰ってきたのですが、あまりの早さに皆が驚きます。料理長に質問されても、ゼーゼーいって何も話せません。そのくらい全力で走っていたのです。厨房が落ち着いた頃、初めて料理長が話しかけてきます。今までの経緯を話したところ、いたく感動してくれました。その翌日、全員を集め、正社員でも何人もカウンターに入れるのを待っている人がいる訳ですが、事情を説明し、あと2か月で店を開くまでに彼を何とかしてあげたい、協力してくれと皆に頭を下げて頼みます。その人の一生懸命さを皆が認めていたため、皆が協力してやるという気持ちで一つになったのです。そうして、修行の日々を終え、開店の日を迎えます。その日、カウンターで飲み物を作る指導してくれた人が初日はいろいろあるからと言って、店を休んで手伝いに来てくれました。料理長がタッパに様々な料理を作って持ってきてくれました。本人は号泣です。そうしてお客様に喜んでもらいたいをコンセプトにしたこの店は大繁盛し、すぐに5店舗まで広がり、そうして彼は独立して地元にはやはり大繁盛の引きこもりの人たちを集めて北海道で農業をしたり、障害を持った人たちが働けるレストランを経営するようになるのです。

これもその人が、「他のために」、「人のために」という利他の精神を貫いたからなのです。また、この話には人は誠意を尽くすと人は動いてくれる、自分の運命を大きく変えられる、ということも教えてくれています。「親ガチャ」などないのです。自分が変わる事、そして誠意を尽くして努力することでも皆さんは変わることができるのです。これからどう生きていくかなど、まだ皆さんはあまり考えたことがないかもしれませんが、今日のこの話を心のどこかにしまっておいて下さい。